江戸歌舞伎と不夜庵

――市川栢莚・金井三笑を中心に――

宮木　慧太

はじめに

本論考では江戸の歌舞伎関係者と不夜庵太祇、不夜庵二世五雲の交流を考察する。まず、江戸劇界と不夜庵の繋がりについて概観し、次に不夜庵と狂言作者金井三笑及び役者市川栢莚（二代目団十郎）との交遊について述べる。

一、江戸歌舞伎と不夜庵

太祇は江戸の人で、宝永六年〈一七〇九年〉生まれ、水国、紀逸の下で江戸座の俳諧を学んだが、宝暦元年〈一七五一年〉に京へ上り、その後、島原に住んで不夜庵と号した。島原では傾城屋主人桔梗屋呑獅の援助を受け、不夜庵を構えて俳諧活動を続けた。その一方で、遊女や子供たちに習字を教え、吉原から燈籠行事を持ち込むなど、多彩な足跡を残した。

太祇とは親友で、江戸座の俳諧をともにし、宝暦二年に二人で筑紫へ旅行したり、宝暦六年の江戸帰遊で太祇は五雲のもとに滞在したりした。五雲も明和年間に島原に移住し[1]、寛政七年〈一七九五年〉までをそこに過ごした。明和八年〈一七七一年〉に太祇が没すると、不夜庵二世として活動した。

二人の歌舞伎関係者との繋がりを示す最も古い資料は寛保三年〈一七四三年〉刊の『置土産』（富山県立図書館志田文庫蔵）である。本書は訥子（初代沢村宗十郎）が江戸から故郷大坂へ戻る餞別の句集であり、ここに水語（太祇の初号）・

五雲が入集する。

『役者の発句』[2]には、寛延元年〈一七四四年〉春[3]「嵐吉弥ほめ言葉御座候に付、木挽町役者中よりいわゐしてほつ句つかわし候」の箇所に五雲、水語が出句する。同書の延享二年秋「森田勘弥つゐぜんに惣座中発句致候」の箇所には五雲が追善の発句を出句している。これは四代目森田勘弥（寛保三年九月十七日没）の三回忌追善である。

二人が劇界と関係を持った経緯は明らかでないが、二つの例はともに歌舞伎関係者が主体となったもので、他に参加する俳人は多くない。二人と歌舞伎の関係は浅いものではなかったことが推察される。

なお、天明三年〈一七八三年〉に没した初代尾上菊五郎の追善集『梅幸集』（天明四年刊）は五雲が編み、五雲による追悼文の「四十年来因深」という言葉からは、五雲と梅幸の付き合いが寛保年間〈一七四一年～一七四四年〉から延享年間〈一七四四年～一七四八年〉あたりに始まったことがわかる。[4]右の『役者の発句』の例と重なる時期であり、この頃が太祇・五雲と劇界の交渉の始まりと見て良いだろう。

江戸歌舞伎界との関係は二人が京へ移り住んでからも続いた。時代は下って容楊黛『歌舞妓之花』（天明二年刊、『洒落本大成』十二巻所収）に以下のようにある。[5]

国猿「（略）我等事も上京の節は。川東にも俳友をちなみ申たが。又あの方は物事手軽で。芝居役者では慶子里虹。点者には太祇・五雲。遊人には桔梗屋の呑獅など。西東の友でござった。（下略）」

太祇は明和八年に没しており、これは五雲が不夜庵を継いだ後である。先に述べたように、呑獅は太祇・五雲を援助した傾城屋主人で、島原では最も有力な人物であった。[6]

この記述は、筆者が個人的に不夜庵と交渉を持っていたことを述べるのではなく、太祇や五雲が江戸歌舞伎界に広く繋がりを持っており、またそれが知られていたことを示すものではないだろうか。

二、金井三笑と不夜庵

金井三笑は宝暦から寛政にかけて活躍した狂言作者である。本節では三笑の俳諧活動について述べ、また薙髪名について従来説の誤りを正す。三笑は本業の傍らで俳諧に遊んだ。最晩年にあたる寛政四年に剃髪し五盛を名乗った。従来、これが「土盛」とされていたのは誤りである。三笑は寛政年間の不夜庵関係の句集に五盛として入集する、三笑と不夜庵の繋がりも考察する。

金井三笑は享保十六年〈一七三一年〉に生まれ、寛政九年〈一七九七年〉に没した。江戸中村座譜代の手代で、宝暦初めに帳元に、同四年には狂言作者を兼ねるようになった。後に彼は「江戸紫根元曽我（えどむらさきこんげんそが）」「蛇柳（じゃやなぎ）」といった作品で大当たりをとり、人気作者となる。その合理的な作風は「三笑風」と呼ばれ、三升屋二三治は『作者店おろし』で三笑を「誰あって及ぶ人なき、古今の稀者なり」と評している。

宝暦六年に炭太祇が江戸に帰遊し、句集『夏秋集』を編んだ。その中に三笑の名前を見ることが出来る。

於奴亭興行

葉ざくらや三ッ四ッふたつはつ鰹　元升
　瀧むせぶなり御好みの夏　太祇
道もせに翌の馬の髪ゆふて　市栖
　風にも塵の誇るなるらし　連尺
豆腐屋も片手は延て水の月　茶外
　後れ相撲の愛かこぼるゝ　道院
届てよ紅粉画は江戸の紅葉の賀　花暁
　あまき教の恋やしぬらむ　熊文
放し鳥雀ばかりも寂しきに　三笑
　晴天を出て戻る晴天　市栖
伯了は見知らぬものに日を潰し　連尺
よすれば礒の砂たゝむ浪　花暁
時雨来て葉越に鐘の音すなり　熊文
　五山集る宋の請取　元升
蒟蒻は見るとおかしい人なれや　道院
　朧月夜に骨牌ぱち〳〵　仝
廻状に猿の役目の花靫　連尺
　春日は墨に風光る町　茶外
屋根葺かひよいと立たる空暮て　市栖
　陀羅尼の声はまつしろな声　熊文
山の奥不思議の醤出来るよ　太祇
　冬至の客の殖る年月　三笑
もの問ふなんとこゝらに伽羅稲荷　道院

一句一直罰盃めぐつて茶外三斗、元升五斗、明けなば酒泉に向んとのゝしる。花暁は瀟灑たる白面郎、觴を挙て皎として風を愛し、道院百杯文台に座す。毫を揮て唫声さはやかなり。太祇酔眠は船に乗に似たり。連尺・市栖百川を吸、高吟四莚を驚かし、忽然と暁天をおぼゆ。この興いづれの年に歟あらむ、二十三句にてとゞむ。

（東京大学総合図書館洒竹文庫蔵『夏秋集』[7]）

太祇は宝暦六年の夏秋を五雲のもとに寄寓して過ごし、

その間に紀逸、湖十をはじめ江戸座の俳人たちと旧交を温めるとともに、様々な歌舞伎関係者とも親交を深めた。

この連句では太祇、三笑とともに花暁（初代中村喜代三郎）の名前を見ることが出来る。三笑が中村座帳元を勤めていた時期であり、同じく中村座に勤めていた花暁と句座をともにしていたのだろう。この句会は、夜、盃を重ねながら、くだけた雰囲気で行われたようである。興に乗って気ままに連句を巻き始め、疲れた頃に自然に終わるというものだったのだろう。酒の縁語仕立ての付記にも遊び心があふれており、これも場の雰囲気を表しているのではないだろうか。

なお、『夏秋集』に出句する歌舞伎関係者は別表の通りである。『夏秋集』の他にも、不夜庵太祇及び不夜庵二世五雲の手になる句集ほぼ全て[8]について、出句する歌舞伎関係者をまとめた。

次に三笑が不夜庵の句集に出句するのは天明八年刊の『俳諧玉章（はいかいたまずさ）』である。五雲は安永年間に島原に移り住んだが、天明八年の京の大火にあって一時帰江した。その際に編んだのが『俳諧玉章』である。なお『俳諧玉章』には園枝、十町、薪水、訥子といった三笑と親しい役者が出句している。あるいは三笑と役者連中が江戸に下った五雲を囲んで句会を設けたのかも知れない。

けふも又なくやさつきの雨蛙　　三笑

（芭蕉庵文庫蔵『俳諧玉章』、『近世俳諧資料集成』所収）

三笑は五雲編『三都朝春興』（寛政五年刊）及び同じく五雲編の太祇追善集『その秋』に五盛の名で出句している[9]。両者を順に引用する。

他境句到来任巡　東都より文通

…（略）…

都の花を詠んと、冬より登り来、我庵を訪寄てかく書のこしありしを降つもるこゝろばかりの小雪かな

微窓五盛

（角屋蔵『三都朝春興』、『島原角屋俳諧資料』所収）

おなじ秋先だちて

我が親もともに都や夢の秋　　江戸訥子

此秋都に在て太叟の安令忌にあふ

めぐり来しまよなか月の年の数　　、三笑事五盛

（都立中央図書館加賀文庫蔵『その秋』寛政五年）

『その秋』の「、」は「江戸」を意味する。訥子の次に「江戸三笑事」として登場する五盛はまさしく金井三笑であろう。「五盛」の名は享和三年『戯財録』の記述にも確認できる。

一　金井三笑　井筒屋半九郎といふ張本。作者と成、上手の名あり。威勢有作者。法体後、

五盛と改む。[10]

（『近世芸道論』岩波書店『日本思想体系』第六一巻、昭和四七年）

なお郡司正勝氏は「五盛」について「土盛の誤り。寛政四年に劇界を退き、落髪した時の称」と註をつけている。

三笑は寛政四年に引退し、その後、消息に空白の部分があった。『寛政五年歳旦』の「都の花を詠んと、冬より登り来」から、寛政四年の末に上京し、少なくとも寛政五年の春先の花の咲く頃までは滞在したことになる。『その秋』の「此秋都に在て」から、さらにその寛政五年の秋にも京にあったことが推察できる。（この間ずっと在京したのか、江戸に戻ったのかは明らかでない）

この時期の三笑の足取りを掴めたことは意義深い。大坂にあった並木五瓶は江戸に下り、寛政六年十一月の顔見せ興行に参加している。古井戸秀夫氏は五瓶の江戸招聘に三笑が関わっていた可能性を指摘するが、[11]今回、五瓶の江戸下りの直前に金井三笑が上方を訪れていたことが明らかになったことにより、古井戸氏の推論が側面から補強されることになろう。

ここから、不夜庵太祇及び五雲と三笑がどのように繋がりを持ったのかを考察する。三笑と五雲が同時に入集する句集は四点ある。

まず、宝暦二年〈一七五二年〉十一月、梅幸は市村座「梅桜仁蝉丸（うめさくらにんせみまる）」で元服するが、その際に周囲の人々が祝賀の吟を送っており、それが『役者の発句』（都立中央図書館蔵）に書き留められて残されている。そこに三笑、五雲が出句する。しかし、三笑は芝居関係者の並びに、五雲は最後部に春色・百庵とともに配され、ここに繋がりは感じられない。（梅幸と五雲の関係については先に触れた）

また宝暦四年刊の二世雀庵一麿編『誰がため』（『関東俳諧叢書』第六巻所収）、宝暦六年に栄蛾の編んだ、その妹の追善集『心のしをり』（芭蕉庵文庫蔵、『近世俳諧資料集成』第三巻所収）、及び宝暦七年刊の秀谷編『俳諧拾遺清水記』（『関東俳諧叢書』第六巻所収）に三笑と五雲が同時に入集する。俳諧活動の場に重なる部分があったとは想像されるが、ここでも特に両者の直接の繋がりを指摘できる点はない。

光延真哉氏「金井三笑と中村座」（『国語と国文学』二〇〇七年一月号）にまとめられる通り、他に三笑が出句する句集には、初代瀬川菊次郎編『その菊』（寛延四年刊）があり、他に管見に入ったものとして『新石なとり』（宝暦二年序）があるが、太祇・五雲との関係を示すものではない。

三、栢莚と不夜庵

前節で不夜庵関係の句集に三笑が入集し、寛政四年末以降に五盛を名乗ったことを指摘した。本節では金井三笑が栢莚（二代目市川団十郎）を介して太祇や五雲と関係を持った可能性を指摘したい。先行研究で明らかにされている三笑と栢莚の関係に触れ、次に栢莚と不夜庵の交流について考察する。

光延真哉氏は栢莚と三笑の深い信頼関係に言及し、例の一つとして『市川栢莚舎事録』に記される宝暦六年の句会をあげる。[12] 光延氏はこの句会について人形町の栢莚新居完成を祝う十人程度の会であり、きわめて私的な性格を持つと指摘し、参加した三笑と栢莚の深い関係を裏付けるものとする。

さてここから不夜庵と栢莚の関係を考えてみたい。[13] 享保十五年刊『父の恩』[14]に太祇の江戸在住時代の師、水国が出句する。本書は才牛斎三升（二代目市川団十郎）が、初代団十郎の二十七回忌にあたって編んだ追善句集であり、さらに初世没後、刊年の前年享保十四年までに没した役者を記し、それぞれに対する追善発句を集めている。ここに掲載される歌仙に、水国の号が見え、また水国は初世追善発句及び大谷広右衛門の追善句を詠んでいる。水国と栢莚は俳諧において繋がりがあったようである。

その後、訥子編『置土産』[15]（寛保三年刊）、二世湖十編『ふるるすだれ』[16]（同年刊）、二世湖十編『解夏草』[17]（延享元年刊）、寥和編『俳諧職人尽前集』[18]（同年）、紀逸編『平河文庫』[19]（延享五年刊）のそれぞれに栢莚と水語（太祇の初号）が見える。直接の関係を示すものではないが、俳諧をしていた活動圏は重なりを持っていたことがわかる。

直接の関係として、管見に入った最も古いものは、五雲が延享元年に栢莚に送った手紙である。『市川団十郎日記発句集』（東京大学総合図書館洒竹文庫蔵）に以下の記述が見える。

三月廿六日夜、五雲より手紙来て、伊勢の津の観世音御開帳始るよし、奉納発句

暮どきに門より知るゝ伊せ桜　仝（筆者註、栢莚）

これは延享元年三月の日記である。延享元年四月から伊勢白子山観音寺子安観音の開帳が、順に深川八幡（四月朔日より）及び回向院（五月十三日より）にて行われた記録がある。[20] 江戸在住の頃から五雲が二代目団十郎と繋がりを持っていたことを明らかにする資料である。

前にあげた『夏秋集』（宝暦七年刊）では太祇と栢莚が同座し、他の役者、俳人を交えて二つの歌仙を巻いている。

五雲は座中に見えないが、栢莚と親しかったとされる湖十が参加している。[21]

五代目団十郎が栢莚の追善集を出そうとしたとき、栢莚と所縁のあった五雲が刊行に関わっていた。『三升屋二三治戯場書留』（『日本庶民文化史料集成』第六巻所収）にそれを示す文章がある。

栢莚伝は二代目団十郎の句集にあり。後五代目白猿、不夜庵五雲と題したる冊子あり。天明かのとの丑霜月朔日とあり。右冊子の抜書。

篠塚の画に

岩角に霜ぞ花咲那智若衆　　栢莚

生島新五郎より送る。前に出たる栢莚の集にあり。

はつがつをからしもなくて泪かな　生島新五郎

かへし

其からしきいて泪のかつをかな　　栢莚

まゝの紅葉見に行て御関所を通るころ

通りますとふらばまゝの紅葉かな

此発句短冊に書て下総の何某か蔵といふ

雪のふりたる日あらし小六のもとへ招かれて

いざさらば雪見に小六所まで[22]

ある方へ招れて水仙椿のなげ入を見て

花と花口すいせんとつばきかな

二代目の句てうより五代目にうつり面白し。今七代目とも市川家の発句これと同じ。

二三治のいう「二代目団十郎の句集」とは『栢莚狂句集』[23]のことである。五代目団十郎が天明元年の十一月に本書を刊行するにあたって五雲の協力を得たのであろう。[24]八文字屋自笑編のこの冊子には、五雲写の栢莚像が掲げられている。巻頭に配された自笑の「栢莚伝」には「不夜庵五雲は栢莚と交り深ければ、ひたすらに乞求めて肖像を画しめ、此冊子のはじめに置くこと爾り」とある。二代目団十郎の追善集『栢莚狂句集』にこれほど強い影響力を持っていたのは、やはり生前からの深い繋がりゆえであろう。

ここまで見たように、太祇・五雲と栢莚は江戸在住時代から近くにあり、特に五雲は栢莚と深い関係を築いていた。栢莚と昵懇であり、俳諧もともにした三笑が栢莚を介して太祇・五雲と関係したと考えることは、とても自然ではないだろうか。

おわりに

不夜庵太祇と不夜庵二世五雲は江戸上方の数多くの歌舞伎関係者と交流を持ち、二代目市川団十郎や狂言作者金井

三笑とも深い関係を築いた。寛政年間に五雲を訪ねた三笑は、五盛の号で五雲編の句集に出句し、そこから三笑が上方に遊んだことが明らかになった。

不夜庵歳太祇・五雲が上方にあって、なお江戸の歌舞伎役者たちと繋がりを持った理由は何であろうか。太祇たちは島原に江戸座の俳風を、また他の様々な江戸文化を持ち込んだ[25]。思うに、彼らはその出自を意識し続けながら、島原に活動したのではあるまいか。役者たちと交遊を続けることで、江戸歌舞伎という江戸文化の粋を感じ続けていたのではないだろうか。

一方で、劇界関係者にとっても、不夜庵と交わることは江戸・上方の情報交換の助けとなっただろう。不夜庵と三都の役者たちの間には、歳旦帳の句のやりとりをはじめ、折々の文通があったに違いない。五雲は天明八年から度々江戸に下り、江戸の役者たちとも直接交わった[26]。江戸・上方双方の劇界に太祇・五雲ほど通じていた人物も多くはなかろう。劇界関係者にとって不夜庵との関係は有用なものであったに違いない[27]。

【注】

（1）五雲は明和五年末から蕪村の定例句会に参加している。句会記録『夏より』（『蕪村全集』第三巻、平成四年、講談社）の明和五年十二月十四日から名前が見える。
また天明八年刊『俳諧玉章』（『近世俳諧資料集成』第三巻、昭和五十一年、講談社）雞口序文に「（五雲の）京師の住居もはやはたとせちかくなりぬれば」とある。この序文年記は天明八年〈一七八八〉六月であり、その二十年前は明和五年〈一七六八〉にあたる。五雲の移住は明和五年の秋冬の間として良いだろう。

（2）都立中央図書館蔵、立教大学近世文学研究会編『資料集成二世市川団十郎』所収

（3）原文に年月は明記されないが、嵐吉弥が寛延元年正月に江戸に下ったことから推定できる。寛延元年三月『役者文相撲』（『役者評判記集成』第二期）では「此度渡部が女ぼうぜんざい成、夫のかんきわびの為けいせいと成入こみ、忠つねがたくみを見出し舞に事よせ忍びの者をとらゆる仕内当りました」と評される。

（4）以下に引用する五雲による序文、自笑の跋文からは、五雲と梅幸の深い繋がりを見ることができる。さらに、自笑が「深く狂言の真如海の底を探り、優戯の奥儀を極め侍ぬ」と書く

ように、五雲が歌舞伎について深い理解を持っていたこともわかる。

ことしはいかなる年にや有けん、去年の四極廿五日は、年比したしみ交ける蕪村には別れ、悲しみの泪に暮行年も忘がたく、とやかくとあら玉の春をむかへし折から、四日の初たよりに梅幸身まかりぬと告こしぬ、只かりそめのいたはりとのみ聞へしに、永き別とはなりぬ、

梅ちりし浪花たよりや夢の春

と口ずさみて、心ならずも夢人の伏見よりして、舟にうち乗至るに、過し年太宰府の聖廟へ詣でたりし時は、舟を諸ともにせし事など思ひ出られ、いとゞ老の腸もたゆる心地し、猶妻子を見るだに胸ふくれ、きのふは野邊に送りしなどかたり出て、更に袂をしぼりぬ、

終に行年のねがひか西の空

と彼が日頃の存念を手向、追悼の吟を人々より言贈られけるを、其儘に反古となしなんもほゐなしと、自笑にあたへて梅が香を桜木にうつし、世に廣ふせば、せめて亡跡の追福にもなりなんか、且生涯のよしあし等とは、八文舎が筆に書あらはせば、予はた何をか云ん、四十年来因深、我洛に遊ば彼も洛に棲んで相かたらひ、しらぬ火の筑紫の旅さへ再たび舟を同じうし、今一たびは又もやもふでんと、日比約せしも甲斐なく、あな卯の年も暮行名残とはなりぬ

天明四年甲辰正月　　花洛　不夜庵五雲識

如是我聞、不夜庵五雲叟と梅幸とは、鳥が啼あづま路より交り厚く、筑紫の果までも杖を同じうし、或は匂欄のいとまには、不夜の扉を月の為に訪らひ、雪の朝にはいざさらばとて、蓑笠に姿をかくし、あるじの病耳をおどろかしなどして、むかし〳〵の名家大家の古言などを討論し、深く狂言の真如海の底を探り、優戯の奥儀を極め侍ぬ、去りし卯のとしは、浪花の戯をつとめしも、日頃信じ奉る大慈大悲をいのりし応護にや、千手のひいきも多かりしが、聊か風の心地とて、病に臥して終に年のたそがれに、音羽やの瀧の音もたへ〴〵しき、尾上の鐘の声を菊五郎といふ、名ばかりをのこしぬ、嗚呼痛哉優道の響ほとんど絶ぬといふべし、ことし不夜の翁、渠が冥福のためにとて、小冊子を編て予をして梓にのぼさしめぬ、予やそのよしあしの名とげて、身退きしむかし、今のことをおもひ出し幸か、生涯狂言のあらましを、願以此功徳に、八文舎自笑これを書記侍りぬ（天明四年『梅幸集』国書刊行会『新群書類従』所収）

（5）光延真哉氏のご教示による。

（6）宝暦七年から初めて刊行された遊里名寄『一目千軒』の編者

となり、また桔梗屋は最も勢力のある傾城屋であったことが名寄に見える傾城の人数からわかる。

『翁草』巻百五十五（『日本随筆大成』所収）によると、太祇の発案で宝暦四年から島原で行われた燈籠行事では、桔梗屋が最も豪華な燈籠を出していた。本居宣長『在京日記』（『本居宣長全集』第十六巻、昭和四十三年、筑摩書房）にも桔梗屋の燈籠の偉容が語られる。

（7）目録では『長崎紀行』とされるが、『夏秋集』が正しいことは谷地快一氏の指摘する通りである。よってここでは『夏秋集』とする。（『与謝蕪村の俳景―炭太祇を軸として―』平成十七年、新典社）

（8）『石の月』（安永二年、『日本俳書大系』所収）は歌舞伎関係者の句を全く含まないため、省略した。

（9）名前の由来は明らかではないが、仮に三笑が「五盛」の名で出句する句集が不夜庵五雲編のもの以外に存在しないとすれば、「五雲」の俳号との関係も考えなければならないだろう。

（10）なお、国会図書館本と東京大学国語研究室本を確認したが、明らかに「五盛」と判読できる。なお本書の著者自筆本は伝存せず、写本が残るのみである。

（11）古井戸氏は『歌舞伎・問いかけの文学』（平成十年、ぺりかん社）所収「歌舞伎の爛熟」で以下のように述べている。

中村座譜代の子として生まれ、若くして経営の中枢を担った金井三笑が、江戸大芝居の経営が悪化してゆく中で繰り出した施策が、大坂の浜芝居から若き才能を引き抜くことであった。先に述べたように、安永・天明と江戸劇壇の一翼を担った菊之丞、三津五郎、友右衛門ら浜出身の若手は、このような金井三笑の方針のもとに下り、江戸に新風をまきおこすことになった。五瓶の江戸下りは、浜出身の役者では起こすことのできない、奇蹟の神風を、作者に託した金井三笑の最後の賭だったのかもしれない。

（12）前掲「金井三笑と中村座」（『国語と国文学』二〇〇七年一月号）

（13）栢莚の俳諧活動については楠元六男氏『芭蕉、その後』に其角・二世湖十との関係を軸とした考察がある。

（14）この句集に「三笑」の号が見える。光延氏の前掲論考では三笑の父先代半九郎が「散笑」の号を使った可能性が指摘される。もしこれが事実ならば、この「三笑」も同一人物であろう。さらに、先代半九郎が後の三笑の俳諧活動に影響を与えたことも十分に考えられる。

（15）富山県立図書館志田文庫蔵。

（16）芭蕉庵文庫本、『近世俳諧資料集成』第三巻所収。

（17）芭蕉庵文庫本、『近世俳諧資料集成』第三巻所収。

（18）『日本名著全集』（日本名著全集刊行会、明治三年）所収。

(19) 上田図書館花月文庫蔵。

(20) 『武江年表』巻五（『江戸叢書』第十二巻所収）には以下のように記述される。

○延享元年甲子二月十八日改元

（…略…）○四月朔日より、深川八幡宮地内にて、五月十三日より回向院にて、伊勢白子子安観世音開帳

(21) 前掲、楠元六男氏『芭蕉、その後』に述べられる。

(22) 五代目団十郎「いざさらば」の句は、天明元年（辛丑）十一月に三代目嵐小六が江戸へ下り森田座で「時萌於江都初雪」に出演した際に、小六に招かれたときの吟であろう。

(23) 『資料集成二世市川団十郎』所収（立教大学近世文学研究会編、昭和六十三年）

(24) 五雲と五代目団十郎も親しかったようである。五雲編『ふた季道』（寛政三年序、柿衛文庫蔵）に五雲が三升を訪ねた記録がある。

府中二町まちのちかくに市川三升きたりて芝居賑ふ楽屋へ入り東都のものがたりしてしばらく休ふ。菩薩峠興津清見寺

春雨や富士くらくとも三保の松

寛政三年三月、五代目団十郎は江戸を離れ、甲府の亀屋与兵衛座に出勤している。これは非常に珍しいことで、彼が江戸の他で芝居に関わったのは、生涯で二度のみである（前年、寛政二年にも亀屋座に出勤している。古井戸秀夫氏『歌舞伎・問いかけの文学』所収「五代目団十郎と不動」にも詳しい）。そのようなときに約束をして会ったことは、親しい間柄を示すのではないだろうか。

(25) 太祇が吉原の玉菊燈籠の行事を島原に持ち込んだことには触れた。他には、吉原で遊んだ俳諧の趣向を、不夜庵歳旦に用いた例があげられる。『夏秋集』で、太祇は吉原の美人連と新古今集の歌の詞章を用いた付け合いを楽しむ。不夜庵歳旦では、島原の傾城による百人一首や音曲、源氏香に因んだ言葉を詠み込む発句が掲載される。

(26) 『俳諧玉章』（天明八年刊）・『ふた季道』（寛政四年刊）から五雲が天明八年・寛政三年に江戸に下ったことがわかる。『ふた季道』の発句前書や管鳥跋文からは寛政二年にも下ったことが推測できる（このとき『右富士集』を編んだが伝存しない）。

(27) 三代目市川八百蔵・三代目吾妻藤蔵は寛政元年に上方に上り、九月の舞台を勤めた。寛政元年秋に五雲が帰江の意思を告げ、周囲が送った送別・慰留の句を集めた『ふた夜の月』に中車（三代目市川八百蔵）・園枝（三代目吾妻藤蔵）が出句する。その前書には「上がたのしるべ頼みに登りしに」とある。五雲

は天明八年に江戸に下り、五雲と中車・園枝が上方に上る前年に江戸にてやりとりがあった可能性もある。江戸にあった中車・園枝に五雲が何らかの助言・示唆を与えたと考えられるのでないだろうか。なお伊原敏郎著『歌舞伎年表』寛政元年九月の記事に以下のようにある。

九月一日、大阪、市山座（中）、「けいせい蝦夷錦」。作者、七五三助。はぎの方、渡平女房（金作）てつまへ的の介、唖の奴三田平、いわくら主せん、渡平弟胴吉（江戸上り八百蔵）いなば幸蔵、さいばら大蔵、つがる三平（姉川新四郎）うきよ渡平（大五郎）高尾（座本大次郎）写絵（吾妻藤蔵）。

大切所作「呼子島大内糸遊」。吾妻藤蔵勤む。江戸上り八百蔵、京人形の箱より出で、「三番叟」。（市川八百蔵）

（『歌舞伎年表』岩波書店、昭和三十五年）

		生没年	夏秋集	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	梅幸集	俳諧玉章	ふた夜の月	ふた季道	三都朝春興	その秋	平安二十歌仙	秋の余波
			宝暦七年	明和七年	明和八年	安永五年	安永七年	安永八年	天明四年	天明八年	天明九年	寛政三年	寛政五年	寛政五年	明和六年	寛政七年
三笑／五盛	金井三笑	享保十六年～寛政九年	○							○			○	○		
栢莚	二代目市川団十郎	元禄元年～宝暦八年	○													
柏莚／三升	四代目市川団十郎	正徳一年～安永七年	○			○				※		※				
三升	五代目市川団十郎	寛保元年～文化三年							○	○		○				
里虹	二代目山下金作	享保十八年～寛政十一年	○	○	○				○		○	○	○	○		
慶子	初代中村富十郎	享保四年～天明六年	○		○	○	○	○							○	
残杏	六代目森田勘弥	享保九年～安永九年	○													
園枝	二代目吾妻藤蔵	享保九年～安永五年	○													
園枝	三代目吾妻藤蔵	宝暦六年～寛政十年								○	○	○	○	○		○
喜長	四代目沢村長十郎		○													
曙山	二代目沢村宗十郎	正徳三年～明和七年	○		○	○										
訥子	三代目沢村宗十郎	宝暦三年～享和一年		○						○		○	○	○		
雀童	六代目中村勘三郎	元禄一年～宝暦七年	○													
花暁	初代中村喜代三郎	享保六年～安永六年	○			○										
梅幸	初代尾上菊五郎	享保二年～天明三年	○	○	○										○	
十町	二代目大谷広次	享保二年～宝暦七年	○													
十町	三代目大谷広次	延享三年～享和二年				○			○	○		○				
雷子	二代目嵐三五郎	享保十七年～享和三年		○	○	○		○	○							
杉暁	二代目坂田半五郎	享保九年～天明二年				○	○	○								
舎柳	二代中山新九郎	元文三年～天明三年				○	○	○								
英子	初代小川吉太郎	元文二年～安永十年				○	○	○								
哥七	初代中村歌右衛門	正徳四年～寛政三年				○					○					
秀鶴	初代中村仲蔵	元文元年～寛政二年				○										
幸朝	初代尾上多見蔵	宝暦四年～寛政二年				○			○		○					
乕有	二代目中村重蔵	元文五年～天明八年		○		○										
袖哥	初代中村野塩	宝暦二年～安永六年		○												
蘭耕	二代目中村野塩	宝暦九年～寛政十二年									○		○	○		
茶谷	四代目藤川半三郎			○												
鯉長	初代中村粂太郎	享保九年～安永六年		○	○										○	
鯉長	二代代中村粂太郎	宝暦十三年～文化六年										○				
三朝	初代尾上松助	延享元年～文化十二年				○			○			○	○			
薪水	二代目板東彦三郎	寛保元年～明和四年				○			○	○		○				
芙雀	初代尾上新七	延享二年～文化六年							○	○	○	○	○	○		○
眠獅	初代嵐雛助	寛保元年～寛政八年			○	○					○	○	○	○		○

		生没年	夏秋集	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	不夜庵歳旦	梅幸集	俳諧玉章	ふた夜の月	ふた季道	三都朝春興	その秋	平安二十歌仙	秋の余波
			宝暦七年	明和七年	明和八年	安永五年	安永七年	安永八年	天明四年	天明八年	天明九年	寛政三年	寛政五年	寛政五年	明和六年	寛政七年
其答	初代沢村国太郎	元文四年～文政元年			○				○		○	○	○	○		○
市紅	四代目市川団蔵	延享二年～文化五年									○	○	○			○
来芝	二代目嵐三五郎	享保十七年～享和三年									○	○	○	○		○
巴江	初代芳沢いろは	宝暦五年～文化七年			○						○		○	○		○
春水	四代目芳沢あやめ	元文二年～寛政四年									○	○				
杜若	四代目岩井半四郎	延享四年～寛政十二年								○		○				
路考	三代目瀬川路考	宝暦一年～文化七年								○		○				
和考	二代目嵐音八											○				
錦江	三代目市川高麗蔵	宝暦十四年～天保九年								○		○				
少長																
何江																
舞鶴																
中車	三代市川八百蔵	延享四年～文政一年									○					
其虹	初代山下八百蔵	～文化九年									○					
奥山	初代浅尾為十郎	享保二十年～文化一年														○
由男	初代中山文七	享保十七年～文化十年														○
原富	原武太夫	元禄十年～寛政四年	○													

柏莚没後にも同号の出句があるが不明である。
生没年は『歌舞伎俳優名跡便覧』第二次修訂版（国立劇場調査室編、平成十年）によった。